躍進たどる 農機具工業

郷土色豊かな伝統的白根名物物産の主なるものを挙げて見ると、凧、紋、団扇、仏檀、味噌醤油、鎌等々。

この主なる物産中、小農具白根の鎌の伝統は相当古い。戦前「越後鎌」の銘柄に反かぬ切れ味と、地味で根強い組合長瀬田氏の商魂と相俟つて、其の販価は遠く満州に迄販路を拡張し、白根の物産として揺がぬ基盤を築いてきている。

戦時戦後の統制廃止後は往年の活況は見られなくなつたが、品質と名声は高く評価され、全国各地に堅い販路を持続している。現在業者は二六軒、大は二尺余、小は寸余の桑切鎌に至る数十種の製品を作り、白根商工業界に躍進の鎚音を打ち込んでいる。

時代の進展に伴い、農業経営に、土地改良と共に総べてが機械化し、耕作用として耕耘機・除草機、噴霧器、動力脱穀機、籾摺機、精米機、精粉機、米選機等々、副業としては製縄機一式その他ガス井戸用圧搾機等盛んに利用せられ、米倉新潟原平野の中心地白根町はこの好条件に恵まれ、農機具製作が盛んとなり、多年の経験と研究とにより優秀機が続々と製作され、近郷は勿論他県に至る迄販路を広め一般需要者に名声を博し、健全な産業の発達に貢献して居る。

〝凧うちわ〟

骨は荒いが粋づきものよ
白根男と凧うちわ

〝凧うちわ〟この町で作られるようになつたのは、大体二百年程前からだそうで、それ以前に既に小須戸で作られて居つたと云うから、技術はそちらから入つたものと思はれる。かつては横町を中心に五十数軒もの〻「うちわ屋」が隆盛を極め、「横町通れば凧の匂ひがあふれて居る」とまで云はれ、お祭の山車も「うちわ町」として出した程であつたと云う。

現在では製造業者の数は五軒に減つたけれど、量に於ては些さかの衰へもみせず、依然町の重要産物の一つである。

昔はこのうちわも、日本紙を使い、渋をぬつた上に更に「うるし」をかけた頑丈なものであつたが、時の移り変りと資材の値上りに伴い、現在殆んどが色の「ニス」ぬりであり、用途も又専ら宣伝広告用である。

年間に於ける生産高は約二十万本、他にいはゆる上物と云はれる四国丸亀産の骨を仕入れて作るのが約八十万本、合せて大体百万本にも達すると云う。

今後の課題として、この移入骨八十万本を如何にしたら地元で作り得るかにか〻つて居ることであるが、竹材、技術、賃金の問題でなかなか難しいと云はれて居る。尚「凧うちわ」とは別に雅趣豊かな登録「舘風擢うちわ」（現町長塚田氏作）も亦名産「白根うちわ」に更に一段の錦上華を添いて居るものである。

〝今ひとたび藍染を〟 染物

昔と言つて〻明治から大正へかけて三十世帯もあつた紺物屋が今は六世帯を数へるしかない。粋な藍染白根紋で鳴らした時代は、家庭にはみんな紋とりの賃仕事があり、この時代が白根町では一番幸しにゆとりがあつたとか。

紋の凋落は化学染料に依る洗つても色の落ちない気の利いた名古屋物に圧倒されてしまつたのである。然らば全然再起不能だろうか。最近その道の人達でぼつぼつ協議されているからその実現するも遠くはあるまい。

現在の状況

いま専ら染められているものに無地染手拭（形付）、注染（形付）雪花染、紋で一ケ月約三万反が仕上げられ、従事者は一ケ月の延人員千二百人である。この内白根の雪花染は産物や、おしめになるもの、技術的に秀れていて高く評価されている。

染物加工を依頼される販売方面の会社や問屋筋は町業者、新潟吉田その他であるが、横町にある新潟織布白根工場では月産五千反の大部分は綿の縞物で、染物屋さんの染糸したもので織られ現在は県外向になつている。

今後の課題となる染物加工業の発展策として、協業組合体勢の必要も痛感されてくる。

白根町産業界の展望

＊＊＊＊＊

日に月に激動進展して行く世界情勢、日本経済界の余波を受け、商業町白根も大きな変転期に直面して居る。即ち徐々にではあるが工業都市の建設へと云う方向に。

長い間の農村依存の商人町より、生産都市への形成は我々白根町民百年の悲願であり、快哉の事実※※ではある。されど建設、躍進の陰には又脱皮の大きな苦悩をも伴つている。以下、産業界を紹介展望する事により、読者諸兄に其の認識が高まり、産業都市白根の発展に少しでも寄与する処ありせば幸甚である。

＝（編集部）＝

＊＊＊＊＊

醤油味噌醸造元

ヤマキチの商標で、県下は勿論近県に迄其の名の知れ渡つた同店に就ては此処で更めて説明する必要もなかろう。工場敷地二、五〇〇坪に醤油六、〇〇〇石、味噌五六、〇〇〇貫の年間生産能力を有する近代設備は、個人企業としては全国にちよつと類がない。凧合織と共に当町の誇りの一つである。

長年に亘つた統制の打撃も年々回復し、往年の最大実績醤油四、〇〇〇石、味噌三〇、〇〇〇貫を突破する日も間近に迫つて居る。昨年度は二〇名近くの従業員を以て醤油三、〇〇〇石、味噌二〇、〇〇〇貫を生産し三千万円に近い売上を示した。今年三月に昨年同期を[illegible]上廻る成績を示している。その[illegible]した味覚は他所より当に来た御客を魅了せずには置かない。更に角明治以前に創業し四代の長きに続く伝統は、当主吉五郎氏の戦時戦後を通じて、一切のヤミ行為を排斥した正義感と共に益々栄えて行く事であろう。

発展途上にある 寺沢鉄工所

火造専用スプリングハンマーで漸く鳥ぶきを踏りかいした寺沢鉄工所は、今従業員十四名で血みどろの奮斗を続けている。

大正十四年に試作されたものが昭和十二年に至つて完璧に近いものに仕上つた。その後も研究が重ねられ[illegible]各種の細かい[illegible]永い永い研鑽期[illegible]越後人のねばり強い特質を生かしたもので、月潟村大河当の刃物生産者の声援も大きな力となつたのである。東京都の金物問屋通称吉兵工衛氏は土地の刃物業者を寄せ寺沢のスプリングハンマーの優秀性を誉めちぎつて呉れた程である。

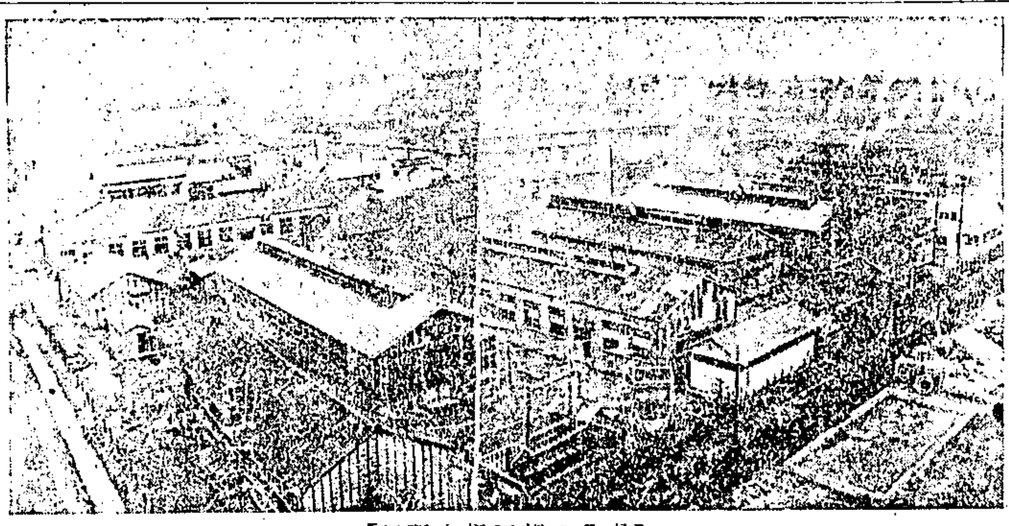
製品種類はスプリングハンマー四種類、十八吋枝型高級ボーン盤七種類、各種型打、鍛火造、農機具、一般利器、打刃物一式となつている。

販売先は甲信越、関東、東北、北海道に及ぶに至つた。現在の年産百二十台、金額で六百万円で僅少の悩みがあるが、是も大資本の投入を得るなら地盤が出来たのであるから、旭日昇天の勢で発展する事請合である。

理研電線白根工場

◆沿革

昭和九年五月、大河内正敏氏外三氏発起人となつて、大和電線株式会社の名称で、東京品川で細銅線並に錫鍍銅線の製造を開始、翌十年七月理化学研究所よりエナメル塗装絶縁電線に関する特許実施権を取得、同時に商号を理研電線株式会社と改め工場を白根町に移転された。これが現在の理研電線白根工場である。



【理研白根工場の全景】

其の後東京に於て他のゴム被覆工場及び通信機用細線工場を買収し、或は子会社を設立、専ら増産を計つた。同十五年一月株式会社三興商会を合併し、その工場市川工場鈴ケ森工場を取得した。十九年八月理研紡織株式会社を合併して白根工場を拡張し、同時に市川工場に都内の全工場を疎開移転して整備した。経営規模の拡大と共に、数次の合併増資に依つて資本金弐千万円になり、更に資本金[illegible]千万円になつた。

◆白根工場の概要

敷地坪数 六、二五六坪
建物坪数 二、一〇五坪
従業員数 三三九人

エナメル銅線は2粍銅線を仕入れ、細線伸銅を為し、電気絶縁塗料のエナメルを塗装焼付するもので、当工場では極細線に重点が置かれ、主として製造する線種は1.0粍より1.025粍である。エナメル銅線の用途は有線、無線、電信、電話、電気計器、ラジオ、テレビジョン、電動機、変圧機等に用いられ、極細線の製造高は全国生産高の30%を占めて居る。

通信機用配線及び細線は電話交換機、送話機用に使用される電線で電気通信省日本国有鉄道に納入して居る。ヴイニール電線は弱電強電何れにも向き、今後の需要は大いに期待されている。

◆現況から見ての希望

白根工場の新製品として特殊エナメル線があつて将来を明るくしている。悲聞伝うるところ白根工場の地の不利が挙げられ、運賃の嵩む事が憂いられている。それはまだまだ末節の問題であつて、実はそれよりも大きな問題は日数の空費にある。即ち原料の白根到着迄が七日、需用方面へ到達する迄が七日で、この十四日間が資金面に大きく響いてくる。当工場の製品は優秀品の折紙がついていて大量の需用はある。が然し、現在よりもコスト引下げ、現在よりも寧ろ安価に大量に供給せよとなつているので、増資をし拡張の段になると当然コストは上るので現在の設備で増産を計る可く、三交替制が企図されている。確たる基盤ができて而うして拡張である。白根町民の絶大な声援の望まれているのが現状である。五月ともなれば工場の籬にピンク色の薔薇が匂うように咲いて、工場の窓辺には、白藤の波が工員さんの清純な心根を現はしている。この美しい田園工場の発展を祈つて止まない。

業績向上の一途をたどる 山崎ヒューム管工場

白根市街地の北部に位して、一本の煙突から黒煙を吐いているのが山崎ヒューム管工場である。

理研電線のお隣の二千坪の地域には瀟洒なる事務所とサロンを有し、三棟の作業場と、続々製産されて来るヒューム管の野天積集積場ありで、毎日十三台平均のトラックで県内各農地改良地区へ積出されている。

年産十万屯で金額にして四千五百万円、従業員数四十人、原材料は一番手近の中之口川から砂、長岡附近の信濃川から砂利、それに浅野セメントと鉄線である。

生産工程は引心力利用で、型の出来たものを蒸気養生室を通すと、十日間放置せれば運搬出来ぬものを直ちに動かし得る形態は多岐に亘つているが、円の一、一〇〇糎以上になると鉄線は二重になる。原料の一日消費量セメント十屯、砂一坪、砂利二坪である。

今後新製品として指向されるものに

ペイル橋杭　土止め
家屋の方面　鉄道枕木用

以上の分野への伸展は早晩来るものと期待されている。

◆輸出産業のホープ モデルシップ

モデルシップは、社長林幸助氏が経営する松栄社の特産品で製品の殆んどをニューヨーク方面に輸出している。装飾美術品で、その優美さは国内は勿論、より以上米国に於て高く評価されている。モデルシップは手先の器用な日本人、特に彫刻技術の進歩している白根人に、はじめて作製可能なもので、家庭手工業の形態をもち、現在二十六家庭が従事している。年産高は現在一万五千ドル〜二万ドル（五四〇万円〜七二〇万円）で、近い将来に五万ドル位迄輸出可能の見込みである。尚販路を国内にも開拓したいとの事で、躍進の一歩をたどる、ドルをかせぐ重要産業である。

◆品質斯界随一 藤村式黒板製作所

藤村式黒板は株式会社藤村黒板製作所の製作品にして、社長藤村平七氏が旧来の粗悪な黒板を改善し、多年の経験と優秀なる技術と設備とを以て、全面総布張りとし、漆は化学的に調合し、六回塗り、艶消し研磨の上仕上げた最高級製品である。現在九人の技術者を有しその年産額約六百万円と推定される。之等黒板は県内諸官庁、学校、工場、商店等に使用せられ、特に学校方面に対しては教材に適したものを考案し納入されるので大いに喜ばれて居るとの事である。尚長野県始め近県いたる所に販路を拡張され、その名が広く知られて居るので、白根物産中重要なる産業の一つである。

一年産一億円 星野プラスチックス製作所

この工場の名を聞くだけで明さを感ずるのはプラスチックスの近代的な感触にあるは勿論どしどし新分野を開拓しつ〻前進しているからである。

◇沿革＝昭和二十年十月合成樹脂食器を試作、当初は子弟のみで第一歩を踏み出した。此の創業時代の苦心談は大いに学ばされるものがある。現在従業員百十名、機械台数八十台年産一億円、品種は食器一般、台所用品、装飾品其の他

◇製造工程＝原料（尿素樹脂、石炭酸樹脂）を製作、品目の重量に依つて上皿天秤で調合し、金型の中へ投入、その金型をプレス機（油圧）で圧力二〇〇ポンド熱（電源）一五〇度にして成形する。

製作工場＝白根町。金型工場＝燕町
営業所＝新潟、大阪、東京
販売店＝全国有名百貨店及び漆器店、陶器店

最近ではハワイ、ホノルル、沖縄へ第四、第五の受註発送中。増築も受註に迫はる〻現状で工場拡張と機械台数を増す為の受電室の建築に着手。製品も他のメーカーより非常に優秀で需要家に大きく期待され、販売成績も日進月歩上昇線を画き、日本プラスチックスの右翼に配されるが、更に研究を続け、日本を代表するメーカーとならん事を期している。